

作——樹海月(きくづらげ)

頬に口付けてみると麻衣子は目覚めました。純白の頬はわずかに紅潮し、金色というよりも月の色に近い髪が肌にはりついでいました。私はそのさらさらの髪を梳いてあげると、ようやく麻衣子は口を開いたのです。

「あなたは誘拐犯としての自覚はあるんですか。人質をそこまでかわいがってどうするんですか」

「私はただ、お父さんにここについてくれって指示されただけ。誰を誘拐してきたのかもわからないし、あなたの身代金がいくらなのかわわかってない」

「立派な誘拐助拳ただけどなあ。まあ、いまさら何を言っても無駄か」

麻衣子は上体を起こすと手錠をじゃらじゃらと揺らしながらいつものアレちようだと無言でせがんできました。私は奥の部屋からケロッグのコーンフレーク・フロスティを持ってくると、皿に移し変えて牛乳を注ぎ、彼女の口元までスプーンで運んでいきます。麻衣子はそれをおいしそうにもぐもぐと食べました。ここに来て以来、麻衣子はコーンフレークと正露丸しか食べていません。

「厨房に行けばもっといろいろな食材あるけど、本当にコーンフレークだけでいいの？」

「うん。私は自分の立場を心得ていますからね。人質はコーンフレークと正露丸さえあれば幾星霜でも生きながらえます」

「正露丸って、そんなにお腹痛いの？ トイレ行く？」

「お腹が痛くて正露丸を飲んでるわけじゃないんです。誰にだっただけ好き嫌いはあるじゃないですか。これがお口直しにちょうどいいん

ですよ」

つくづくよくわからない話を聞き流しながら私は麻衣子の足枷を眺めていました。今すぐ撫でたくなる陶磁器のような素足。私はここに来て人質を拉致監禁しているのではなく、愛しい西洋人形を愛でているのです。

コーンフレークをすべて口に運びきると、皿に残った甘い牛乳を飼犬のようにペロペロと舐めはじめます。皿を空にすると麻衣子は背伸びをし、蚊のささやくような声で独り言を呟きつづけます。彼女の独り言を聞き取れた試しはありません。毎日それを3回繰り返すと入浴の時間となります。

「そろそろお風呂行こうか」
「うん」

話はそれだけです。ポケットから小さな鍵を取り出すと麻衣子の手と足の枷をはずしてやり、首輪に続く紐を左手に握り締めて廃旅館の散策へと出発します。それは愛犬とのお散歩の時間でした。

交通事故を起こして他人の命を奪い、その償いに耐え切れなくなった私の父は犯罪を繰り返すしか脳のない人間へと没落してしましました。何度か身代金目当ての誘拐を企て、警察に見つかることなく成功させ、その報酬で自分自身と私の生計を維持してきました。私も父には文句が言えなかつたし、できることならなるべく協力してきました。今回の任務はこの廃旅館で父の連絡があるまで人質を匿うこと。決して逃がしてはならない。まあ、逃げるような人質ではなさそうですけど。そのほかには何も条件を言われなかつたので、麻衣子は私の好きにすることにしました。

廃旅館は福島県の西郷村から車を走らせて80分、どこだかよくわからない山中にぼつんと存在していました。携帯電話すらも圏外となる辺境の廃旅館を父が見つけて人質を匿う拠点としたのでし